



受け継がれる方言

【足ばひかれん
ごととせんば】

最初の「ば」は、古文でもおなじみの「ば」からきています。「竹取物語」の冒頭の「名をば遺岐の邊（みやつこ）」となむいひける（左）古文の授業で字んだかもしねません。語尾の「は」は「せんば」という形で使われていますが、分解すると動詞「す」の未然形「せ」、打消の助動詞「ず」の已然形「ね」に接尾助詞「ば」がつくことで確定条件を示します。「せんば」が「せんば」として使用した例です。むねむねも長崎で生まれたのでなく、古来が九州にならんでいます。

【はわく】

現在は「はく」とも言いますが、中世の中央語には「はわく」とあります。17世紀初頭の『日葡辞書』にも「はわく」と書かれています。です。その時代には「はわく」は中央語だったものがたまたま方言として残存したものの例です。

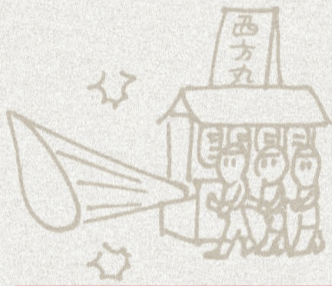
【ズツキヤンキヤン】

同じ「車」を意味する「ズツカン」長崎市、「チントント」トクシカ、（佐賀市、トロンキヤン）大村市など、県内には、鳴り物のオノマトヘ擬音語から来たと思われ、語のバリエーションがたくさんあります。また、カタワマ、ウマキヤンなど、同じ「馬」の人の語もありません。「車」を意味する方言は全国的にも多種多様ですが、ズツキヤンと同じ様に鳴り物を表すオノマトヘから来た「車」の例は、各地に見られるようです。例えば、富山県新立町にはカタトント、トクシカ、右川原のサイコボン、チンカチンカなどは、大鼓や鐘の音が元となつてつた名前ではないかと考えられています。



【ドローイ】

由緒阿弥陀仏の意味。大声で唱えるうちに、唱えやすいうろろに、最後にはドローイといだけになったと考えられます。



【ヨイヤー】

郷土史家の古賀一郎によると、「いよいよ華やか」を意味する「洲華」という中国語が語源ですが、そのまま読めば「ヨイヤー」となることを、訓読みの「よい」を混ぜて「ヨイヤー」になったのではないのでしょうか。



今年度も多くの新入生が本学に入学しました。県外出身の皆さんの中には、長崎の方言のユニークさや多様さに驚いている人もいらっしゃるかもしれません。方言は地域の歴史や文化に根差しています。その魅力と、長崎大学の方言にまつわるさまざまな研究をご紹介します。

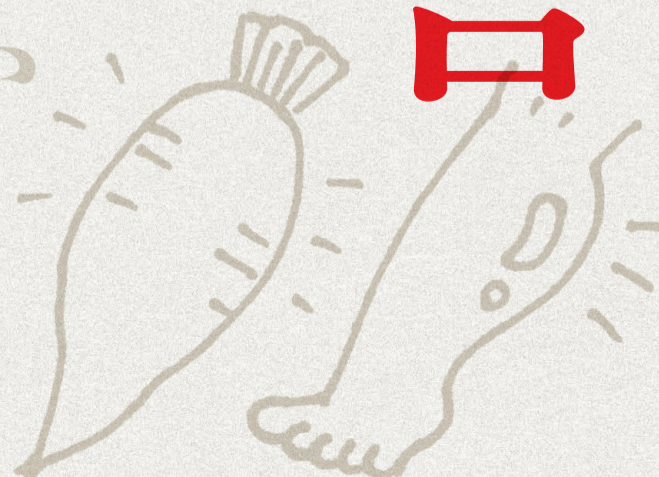
【長崎大学の研究】

【モツテコーイ】
【ショモレーヤレ】
【フトウマワレ】



【ふといー大きい】

『日本国語大辞典』(小学館)の用例を見ると、中世の中央語に例があります。『日本国語大辞典』(小学館)では、新潟県、長野県以西に広く分布していることから、中央語の残存と見ることができるとも、また、「細い」「小さい」の意味として使う地域もあります。例えば、出雲では、「小さい皿のこと」を「はせいこ」といいます。



【ふとか・よか】

【すごか・よか】

形容詞がカて接尾するのは九州の西南部(鹿児島方言)の特徴です。中世末期の長崎で「ふと」(大)が接尾した「ふとん」(大)の文法書『日本国語大辞典』には、Amakata(あまかた)が「Amakata(あまかた) Yoda(よだ)良か、Curca(くら)良か」です。この頃か、方言と「ふと」が接尾した「ふとん」が分かりますが、元は中央語の「良か」(よか)が「ふと」からできたものといわれます。古語としては、「ふと」が「よか」が「ふと」が「よか」という形があります。中世になると「良か」が「よか」で終わるようになります。これが「よか」と「よか」が「よか」と考えられます。

たくさんさんのモッテコイに感動

薬学部2年 村田蔵維 さん

長崎を代表する伝統の祭り「長崎くんち」。山口県出身の村田蔵維さん(薬学部2年)は、5歳の頃に初めて見て以来、毎年見物に訪れるほど熱心な長崎くんちファンでした。そして昨年、長崎くんちへの憧れもあって長崎大学に進学。本学入学を機に、かねてからの夢だった長崎くんちへの出演をついに実現させました。稽古開始から本番までの間に地域の皆さんと交流を重ねる中で、どのような方言や文化にふれたのでしょうか。

——村田さんが出演した新大工町の奉納踊り「曳壇尻」は、どのような演し物ですか。



村田蔵維さん

村田さん 根曳と呼ばれる20人の曳き手が、重さ3トンから5トンといわれる壇尻を、前進させたり後退させたり回転させたりする勇壮な演し物です。私は、壇尻を回転させる時などに「軸」となるポジションを担当しました。先輩から「一番難しいポジションやけん、車輪に足ばひかれん」といって、最初は語尾に「ば」がつく長崎方言に困惑しました。何を言われているのかわからず聞き返すと、先輩はきょとんとするのです。「どこが分かんや」と言われた時には、怒られたと勘違いしました。九州の方言がそうなのかもしれませんが、長崎方言は語尾が強い印象ですね。——長崎くんちに参加している方の多くは、地元で生まれ育った生粋の長崎人ですからね。

村田さん はい。特に指導くださった方々が話す長崎方言は、他の人が話す方言よりも難しかったかもしれません。しかし、時間が経つにつれて、言い回しやイントネーションの感覚をつかめてきました。——「モッテコイ」「ショモヤレ」「フトウマワレ」など、長崎くんち特有の言葉もあります。前の二つはアンコールを意味する言葉ですね。村田さん すべて命令形なのが興味深いです。「フトウマワレ」は、「大きく回れ」という意味で使いま

すが、「大きく」を「太く」と言うのは長崎だけでしょうか? それとも九州全体? それに「ふとか」「すごか」「よか」など、「か」が多用されるのも不思議です。——確かにそうですね。命令形なのは、観客から演者に呼びかける言葉だからかもしれませんね。

村田さん 「か」が付く方言といえ、[よかよか]の使い方も難しかったです。「部屋に入っていいますか?」と尋ねた時に「よかよか」は入ってもいいという意味だと理解できますが、「これいりますか?」と尋ねた時に「よかよか」と返されると、いるのかわからないのかわからず、理解するのが難しかったです。また、良い演技ができた時には、観客席から「よかぞ!」と声が掛かります。——「いい演技だったぞ」と称賛を意味する言葉ですよ。

村田さん そうですね。同じように「ヨイヤー」という言葉も使われますが、一説には「ヨイヤー」は、長崎のハタ揚げ*1で相手の糸を切った時に使われる言葉だそうです。「良いことなり」から派生した言葉で、時代が進むにつれて、近年では、長崎くんちでも使われるようになったそうですよ。年配の方の中には「ヨイヤー」ではなく、「よかぞ」を使う人が多いのも、もともと長崎くんちで使われていなかったからでしょうか。——素晴らしい経験になりましたね。



——本番でモッテコイやヨイヤーが聞こえてきた時には、どんな気持ちになりましたか。村田さん 鳥肌が立つほど感動しました。大勢の観客から、「きばれよ(頑張れよ)」「新大工頑張らんね」「いぞぞ、待とったぞ」と歓声が飛んできた時は嬉しかったです。長崎くんち最終日の諏訪神社の演技が終わった時には、より盛大なヨイヤーとモッテコイが聞こえてきて、疲れも吹き飛びました。——素晴らしい経験になりましたね。



ヨイヤー

モッテコイ



長崎の氏神である諏訪神社の秋季大祭「長崎くんち」。演し物を奉納する踊町は7年に一度の持ち回り制です。新大工町は曳壇尻と詩舞を奉納します。村田さん(写真中央)。



村田さん はい。長崎くんちが終わった後に打ち上げが行われますが、新大工町では打ち上げのことを「鍋洗い」と言うんですよ。昔は小屋入り*2をしたら、一つの小屋に寝泊まりしながら稽古をしていたそうです。稽古中に使った鍋を洗い、それですべての行事が終わるという由来があるようです。この呼び方は、踊町*3によって変わります。——ほかに印象に残った長崎弁がありますか。村田さん 壇尻から子どもを降ろ

す時に肩車をすることがあります。長崎ではこの肩車のことを「ズッキャンキヤン」と言うそうです。——県の伝統工芸「古賀人形」をご存じですか。サルの親子が肩車をしている人形のことも「ズッキャンキヤン」と呼ぶんですよ。村田さん それは可愛いですね。——なぜこんな言葉になったんでしょう。長崎くんちには地域活動の一環でもあるので、新大工町商店街の夏祭

りやお盆に行われる精霊流しにも参加しました。夏祭り会場では「はわいとって」と言われた時は意味が分からず身体が止まりましたね。「はわく」って何だろうと思いました。この時も「はわくって何ですか?」と尋ねると不思議な顔をされました。精霊流しでの「ドーイ、ドーイ」の掛け声も印象的でした。——そうですね。幼い頃から、毎年長崎を訪れる機会があったと思いますが、長崎くんちに参加してみたいことや印象に残ったことがた

くさんあったようですね。村田さん はい。地域の取り組みを通じて、長崎の方言や伝統文化により深くふれることができました。県外出身の友人の誰よりも、長崎人になれたのかなと思っています。*1/ハタ揚げ 長崎では「風」を「ハタ」と呼ぶ。*2/小屋入り 踊町の世話役や出演者が、6月1日に諏訪/八坂の両神社神前で清祓(きよはらい)を受けて、大役の無事を祈願する。この日から演し物の稽古に入る。*3/踊町 長崎くんちにおいて奉納踊りを担当する町のこと。

長崎の方言と長崎くんち

解説

方言研究を通して人や文化の動きが見えてくる

方言とは、中央(京都)から水の波紋のように周りに伝わって残存した言葉とされています。元々は平安時代や室町時代の古語だったものが多く、17世紀初頭に出版されたキリシタン版の『日本大文典』*4や『日葡辞書』*5に、すでに方言として載っているものも少なくありません。そもそも明治政府が東京の山手の言葉を中心とした標準語を定めるまで、日本の話し言葉は方言しかありませんでした。標準語が教科書で教わる整理された日本語であるのに対して、方言は平安時代から変化を続けてきた自然言語なのです。方言研究には語彙や文法など、さまざまなアプローチの方法がありますが、自然言語である方言の広がりや変化の遷移、消滅に至るまでの動きなどを調べると、その背景にある人や文化の動きが見えてきます。そういった点が、標準語にはない研究の面白さだと思います。一方、戦後の行き過ぎた標準語教育やテレビなどの出現によって、方言を話せない子どもたちが増えました。消えるのは仕方ありませんが、消え方が激しいと思います。方言の衰退は、地域の歴史・文化の衰退につながるでしょう。方言がなくなる未来を想像すると寂しいですね。研究や教育を行うと同時に、例えば方言を使った商品を開発するなど、経済効果に役立つような取り組みが進むと普及につながるのかもしれない。



前田桂子 教育学部 教授

オランダ商館長のヘンドリック・ドーフが編纂した蘭和辞典『ドーフハルマ』に関する共同研究など、さまざまな角度から長崎の方言を研究。長崎の歴史や文化に関する課題解決を学術面でサポートする。分野横断型の長崎大学の研究グループ「地域文化研究会」にも在籍。



戦後、方言は悪い言葉だとされていた時代に小学校で使われていた「方言矯正カード」。

*4/日本大文典 修道士ジョアン・ロドリゲスが著したキリシタン版の文法書。 *5/日葡辞書 17世紀初頭に編纂された日本語とポルトガル語の辞書。

足ばひかれんぞとせんば (Illustration of a wheel and a person)

よすおとがかごとかか (Illustration of a carrot)

ふとい=大きい (Illustration of a large object)

はわく (Illustration of a person)

最初の「ば」は、古文でもおなじみの「をば」からきています。「竹取物語」の冒頭の「名をば讃岐の造(みやつこ)となむいひける」を古文の授業で学んだかもしません。語尾の「ば」は「せんば」という形で使われていますが、分解すると動詞「す」の未然形「せ」、打消の助動詞「ず」の已然形「ね」に接続助詞「ば」がつくことで確定条件を示します。「せんば」が「せんば」と音便化した例ですね。どちらも長崎で生まれたのではなく、古典がルーツになっています。

形容詞が「カ」で終わるのは、九州の西南部(肥筑方言・薩隅方言)の特徴です。中世末期の長崎でジョアン・ロドリゲスが著したキリシタン版の文法書『日本大文典』には、Amaca(甘か)、Xigueca(繁か)、Ataraxica(新しか)、Yoca(良か)、Curoca(黒か)などが挙がっています。すでにこの頃から方言として認識されていたことが分かりますが、元は中央語のかり活用(良かり、繁かり)からきたものといわれます。古語としては「シ」で終わる、「良し」が一般的ですが、そのほかに「良かり」という形があります。中世になると「良かる」と、ウ段で終わるようになります。これが省略されて「良か」ができたと考えられます。

郷土史家の古賀十二郎によると、「いよいよ華やか」を意味する「彌華」という中国語が語源ですが、そのまま読めば「ミーホー」となるところを、調読みの「よい」を混ぜて「ヨイヤー」としたのではないのでしょうか。

同じ肩車を意味するヒュウガンガン(長崎市)、チンガンガン(長与町)、チンドン、トクガンガン(壱岐市)、トロンキヤン(大村市)など、県内には、鳴り物のオノマトベ(擬音語)から来たと思われる語のバリエーションがたくさんあります。また、カタウマ、ウマキンキヤンなど「肩」「馬」の入った語もあります。肩車を意味する方言形は全国的に多種多様ですが、ズッキャンキヤンと同様に鳴り物を表すオノマトベから来た「肩車」の例は、各地に見られるようです。例えば富山県、新潟県にはカドンドン、ドデンカッカ。石川県のサイコボンボ、チャンカチヤンなどは、太鼓や鐘の音が元となった名前ではないかと考えられます。



商館長と学者 攻防が見える 文法書



トート・ルデイ 多文化社会学部 助教

鎖国期に日本と交易関係を結んでいたオランダは、開国を境にアメリカやイギリスなどの大国に権益を奪われることを恐れ、日本語とオランダ語の言語政策を進めました。その一環として、出島のオランダ商館長だったドンケル・クルチウスが編纂しオランダで出版されたのが、日本語の文法書『日本文法試論』。海を渡ったこの文法書は、実は現地で混乱を起こしました。トート先生のお話です。

「オランダ政府は日本語を身に付けることによって、日本とのビジネスをイギリスなどに負けずに継続しようと考えました。クルチウスは日本語を頑張って習得し文法書を編纂しましたが、彼は言語学の専門家ではなかったため、オランダ政府は、本当に役立つものなのかオランダに住む日本語学者のホフマンに意見を求めました。一方、彼自身も日本語の文法書の出版を準備していましたから、良い気持ちはしなかったようです。ホ

フマンは中央語を正しい日本語と捉えていました。そして、学者ではない素人が編纂した文法書だとして、下に見る思いがあったのかもしれませんが、ホフマンは大量の注釈を加えます。しかし、その中には誤りではなく単に長崎の方言だった言葉も含まれているのです。例えば、「よか・さむか」など、九州で使われる「か語尾形容詞」*がたくさん出てきます。クルチウスがローマ字で「よかか・よかであろうか・よかではなかか」と記した部分で、ホフマンは「よか」に「ヨキ」の読み仮名を付けて、注釈では語尾の「か」を怪しんでいます。

トート先生の母校であるオランダのライデン大学には、ほかにも研究対象とされていない江戸時代の日本語文典などが多数眠っているのだとか。そしてその中には、長崎の方言が含まれている可能性があります。「当時の筆記体やローマ字を解読するのはとても難しく、そのままで資料として使えません。活字に翻

*か語尾形容詞 形容詞の終止形や連体形の活用語尾が「か」になることを指す。



トートルデイ先生の専門は言語学。国内外に残る貴重な文典に記された日本語の語彙や文法等を基に研究を行っています。

刻したり現代語訳を付記したり使いたくしたのにして公開することが、私の大きな研究目標です。より多くの研究者の一助になることを目指しています。



長崎大学附属図書館医学分館では、旧長崎医科大学法医学教室の初代教授である浅田一氏が寄贈した『日本文法試論』を所蔵。文法書の一部を抜粋した珍しい一冊です。「ホフマン教授が印刷過程で余った一部を試し刷りしたものを、かき集めて製本したのでしょう」とトート先生。

海を渡った長崎弁、地域に生きる長崎弁



野田智子 多文化社会学部 助教 ※取材時、現在は長崎国際大学に移籍されています。

多様な方言が残っていることで知られる島原半島。日本語学が専門の野田先生は、西南部の雲仙市南申山町を主なフィールドとしています。南申山町の方言には、どのような特徴があるのかお聞きしました。

「言語研究の分野では、周囲との言語差が著しい場所を“言語の島”と言うことがあります。南申山町内でも海沿いに位置する国崎半島がこれに当てはまるでしょう。隣り合う集落の人でも、理解が難しい語

彙や文法が残っています。言語差が生じる理由には、地形や交通路の問題が考えられますが、同じ町内ですから、地域間の交流や言語の接触も行われてきたはず。それなのになぜ、言葉が均一化に向かわず変化しないのか疑問が多いですね。

どのような方法で調査は進んでいるのでしょうか。

「話者の方々の会話を録音した音源を基に分析を行っています。例えば長崎県下広域では、“バスが来た”を“バスの来た”と言うことがありますが、南申山町の言語の島地域の方々は言いません。他にも“オロカバエ(植物の自生)”“サダチ(にわか雨)”“ウラ(わたしの一

人称)”など独特の語彙が残っています。島原半島南部には島原・天草一揆後に、幕府の命によって四国の小島島から多くの人が移住したと言われています。このような歴史的な背景が、方言にも関係しているかもしれませんが、移住の事実が史料として残っていません。集落間の言語差を示すことはできても、四国由来の方言である可能性にまでは言及できないのが現状です。

一方で、伝統的な方言を話す方々の高齢化が進んでいます。野田先生は続けます。

「消えゆく方言を記録することも、方言研究の重要な目的であり価値と言えるでしょう。将来、ふたたび方言を復活させる動きが出てくるかもしれません。そういった時に正しく活用できるよう、話し手の方々のアイデンティティや生活史のようなものも含めた、より良いデータを記録していきたいですね。」



現地調査の様子。南申山町在住の話者の方々に協力いただいています。「定期的に皆さんにお会いして、お話をするのは楽しいですよ」と野田先生。

伝統的な方言をより良い状態で記録する



新調した龍頭

since 2004 [長崎大学龍踊部] 理想の龍を追い求めて 踏み出した一歩

—村木さんは熊本県出身ですが、長崎くんちで踊町の一つになっている筑後町の奉納踊りは龍踊なんです。そこに龍踊部の仲間と一緒に出演させていただきます。一昨年は村木先輩も五嶋町の龍踊に出演されたんですよ。

—龍踊部から長崎くんちに出演する、新しい伝統が出来るようですね。昨秋、長崎大学に龍踊部があることを知り、携わってみたいと思いました。

濱田さん 私は県内出身で、幼い頃から龍踊に憧れていました。長崎大学に入学する際、部活で龍踊ができることを知り、私も龍衆として龍踊に携

わりたいと思いました。今年の長崎くんちで踊町の一つになっている筑後町の奉納踊りは龍踊なんです。そこに龍踊部の仲間と一緒に出演させていただきます。一昨年は村木先輩も五嶋町の龍踊に出演されたんですよ。

—龍踊部から長崎くんちに出演する、新しい伝統が出来るようですね。昨秋、長崎大学に龍踊部があることを知り、携わってみたいと思いました。

濱田さん 私は県内出身で、幼い頃から龍踊に憧れていました。長崎大学に入学する際、部活で龍踊ができることを知り、私も龍衆として龍踊に携

わりたいと思いました。今年の長崎くんちで踊町の一つになっている筑後町の奉納踊りは龍踊なんです。そこに龍踊部の仲間と一緒に出演させていただきます。一昨年は村木先輩も五嶋町の龍踊に出演されたんですよ。

—龍踊部から長崎くんちに出演する、新しい伝統が出来るようですね。昨秋、長崎大学に龍踊部があることを知り、携わってみたいと思いました。

濱田さん 私は県内出身で、幼い頃から龍踊に憧れていました。長崎大学に入学する際、部活で龍踊ができることを知り、私も龍衆として龍踊に携

住吉まつりなど、長年お世話になっているお祭りに加えて、今年1月には、長崎で開催された「そなグループ B.LEAGUE ALL-STAR GAME WEEKEND 2026 IN NAGASAKI」にも出演させていただきました。



部長の濱田尚平さん(多文化社会学部3年)(左)と前部長の村木龍哉さん(龍踊部4年)。



これまでは紙製のウロコを結束バンドで取り付けていましたが、今回は長崎くんちで使われている龍と同じように、ウロコ一枚一枚を糸で縫い合わせる手法を取り入れました。



龍踊部の皆さん。長崎くんちでもおなじみの伝統芸能「龍踊」を市内各地の祭りやイベントで披露しています。新しい龍頭は勇ましい表情が特徴。

卒業生から後輩の皆さんへ



川越史夏さん 2017年卒業

龍を通じて交流が続く、それが龍踊部の魅力です

龍踊部設立のきっかけは、水産学部の学園祭「鴻洋祭」に龍踊を招いたことだと聞いています。鹿児島出身の初代部長が「私たちがやりたい」と奔走されたそうです。

大学を卒業した後も仲間の結婚式など、機会があるたびに龍踊を披露しています。こうやって長く演技にかかわることができ

ますし、元部員同士で年齢の垣根を越えて交流が続けられることが龍踊部の魅力だと思っています。

龍頭は部設立以降、約10年間隔で新調されてきました。今回、村木君たちの強い想いで、代々受け継いできたものから表情が変わった新しい龍頭が生まれました。そのことを初代部長に

報告すると「彼らがやりたいといい、自主的にやるのはいいことだ」と応援してくださいました。これからも後輩の皆さんには、改善点があれば見つけて対処し、良いところはどんどん伸ばして欲しいと思います。私たちは龍踊部の存続を願う仲間ですから、困ったことがあればいつでも力になります。

龍踊部の情報はここから

instagram

Special Interview

[特別対談 学び舎で語り合う]



お二人の対談の全文は
こちらからも
ご覧いただけます。



とくだまさひろ

みかみじろう

得田真裕さん × 三上次郎先生

作曲家

教育学部 名誉教授



とくだまさひろ

1984年10月2日生まれ。鹿児島県出身。長崎大学教育学部芸術文化コースを卒業後、ゲーム制作会社を経て、現在はワンミュージックに所属。テレビドラマ、ドキュメンタリー番組、映画など幅広いメディアで活躍中。主な作品は映画「劇場版 奥様は、取り扱い注意」、ドラマ「MIU404」「アンナチャール」「Silent」など。

『第48回 日本アカデミー賞』（2025年）の優秀音楽賞を受賞した

作曲家の得田真裕さんは、教育学部の卒業生です。

2026年3月、恩師である三上次郎教授の退職に合わせて対談が実現しました。

懐かしい学び舎で再会したお二人は、どんな思い出を語ったのでしょうか。

三上先生 得田君が1年生の頃から、授業の枠外で和声などを教えていましたね。そもそも私は才能というものを信じていません。あるとすれば持続する力ですが、得田君はそれを持っていました。

得田さん ありがとうございます。より多くを学ぼうと思った時、自ら動く姿勢が大事ですし、それに応えてくださった三上先生と出会えたことが幸運でした。

三上先生 入試の時のことはよく覚えてますよ。得田君はギターを抱えてやって来て、試験室では靴を脱いで弾きました。

得田さん 自宅で練習する時には靴を履かないので、足を台に乗せた時にソールの高さが気になったからです。失礼だと思いつつ脱がさせていただきました(笑)。

——学生を育てる中で、モットーとされてきたのはどのようなことでしょうか。

三上先生 作曲の分野では、教えようとした途端に自分の世界を押し付けてしまいがちです。そうすると、その教員の世界の枠から出にくくなり、結果として学生の成長は止まりますから、得田君にも作曲の方法を教えた記憶はほとんどありません。自由の尊重は無責任に放っておくこととは違います。教員である自分の後を追うのではなく、違う自分の世界を見つけて自由に飛び出して行って欲しいと思っています。

た。私が書いた曲と得田君が書いた曲を比べると、まったく世界が違うことが分かるでしょう。それでいいんです。——得田さんは、年間どれくらいの曲数を作曲されているのでしょうか。

得田さん 年によって波はありますが、だいたい150曲くらいでしょうか。——作曲するうえでどのようなことを大切にされていますか。

得田さん 私が活動しているジャンルは、ドラマや映画などに付ける劇伴音楽ですから、自分のオリジナルのものではなく、作品の世界観を崩さない曲作りが求められます。その中で監督から提示された要望のさらに上を行けるように、自分なりのエッセンスを加えたり提案をしたりします。お互いにアイデアを出し合える関係性を保つことも大切です。

——映画『ラストマイル』で日本アカデミー賞の優秀音楽賞を受賞されました。どういった点が評価されたと思いますか。

得田さん チーム力が大きかったのではないのでしょうか。『ラストマイル』は『アンナチャール』『MIU404』に続く、三部作の集大成でもありました。監督、脚本家といった多くのスタッフの思いが三つの作品を通して結集したからこそ、心を動かす音楽を生み出すことができました。

——行き詰まることもあると思います。

得田さん クリエイターの多くが発想や閃きを追求する中で、不要なこ

ろまでこだわり過ぎてそうなることはあります。締め切りは大変ですが、逆に言えば、ゴールがあるから「ここまで」と区切ることが出来ますし、そこまで全力で頑張ろうと思えるエネルギーになっているのかもしれない。

——三上先生は教員人生をどのように振り返りますか。

三上先生 以前勤めていた大学を含めると、教員人生は40年になりました。この40年の星霜の中で私が感じているのは、色々な意味で時代は変わったという印象です。得田君がいた頃の彼らは本当に自由でした。音楽棟で寝泊まりしながら勉強していましたからね。

得田さん 教室は大きな音が出せるので、自宅よりも大学にいる時間の方が長かったのは確かです(笑)。朝早くの音が聴こえてきて、作曲や研究に取り組むむむきな姿を感じました。自分も頑張らなければと意欲がわいたことを覚えています。——先生から、教え子の皆さんに伝えたいことはありますか。

いてきた自分とも勝負しなければなりません。これはかなり辛いことです。自分の衰えを目の当たりにする時期が、いずれは訪れるということ覚えておいて欲しいですね。

得田さん ありがとうございます。できるならばずっと過去の自分を越えていきたいです。時間の制約など言い訳にしがちですが、先生のお話を聞いて身が引き締まりました。——得田さんから、三上先生へメッセージをお願いします。

得田さん 時代が進むにつれて変化していった教育現場で、音楽の世界を志す学生たちを育てることは容易ではなかったと思います。本心に感謝の言葉しかありません。私自身、大学時代を振り返ると自由な学風に助けられました。そして先生と学生の結びつきなど、都市圏の大学では得られなかった経験が私をつくってくれました。それぞれの場所や分野で輝く卒業生の皆さんの姿が、長崎大学で学ぶ後輩たちの後押しになると思っています。



寄附に込める想い

バイタリティ溢れる若者を育ててほしい

株式会社ささや
代表取締役

笹本強志さん

弊社は、長崎県内を商圏としてユニフォームの卸販売業を営んでいます。もともとミシンの修理が専門だった父の笹本長四郎が、戦後にカッターシャツや下着などの既成品の販売を開始。それと並行して、大工職やび職の皆さんが着用する「タンクズボン」の別注生産が入ると商売は軌道に乗り始め、本格的な起業に至ったと聞いています。当時は27坪の社屋に20人ほどの職人が住み込みで働いていました。私自身、その環境の中で大事に育ててもらったおかげで、周囲の人々に配慮する気持

ちが自然に芽生え、経営者としての指針につながりました。父の代から、地道に営業努力を重ねた結果、現在の顧客数は県内4000社ほど。例年200社前後の新規取引先を獲得しています。これまでに長崎大学水産学部の乗船実習の作業服や船員服などの製作、長崎大学病院の皆さまとマタニティ用の看護衣を開発させていただいたこともあります。さまざまなニーズがある中、新規起業されるお客様の多くが、ユニフォームに対する思い入れが強く、ご要望をどのように形にするのか、高い



2025年10月22日、笹本茂子専務様(写真左から2人目)をはじめ、働ささやの皆さまに来学いただき、大学関係者への目録贈呈式を執り行いました。

ネット販売が主流となる中、直接お客様と向き合える強みを活かし、社員一人ひとりが誠心誠意努めています



笹本強志さん

営業力が求められています。経験を積んだ社員も若手社員も、常日頃からチャレンジ精神をもって、飛躍してほしいと伝えています。

西遊基金には、これまで個人名義で寄附させていただいておりましたが、創業85周年の節目にあたり、昨年、「株式会社ささや」として利益の一部を長崎市、長崎大学、長崎大学病院に支援させていただきました。長崎の企業として、物心両面から幸せを追求し、地域社会に貢献していくことを願っています。

きたため感慨無量です。少額であっても、地域あるいは教育機関の発展につながる一つの石ころになることができると考えています。

一流企業に勤めていても、短時間で辞めてしまう若者が増えているそうです。大学のカリキュラムの一環として、長期にわたって企業現場を体験できる機会や地場企業と深い関わりを持つ時間を増やしていただけると、一人でも多くのバイタリティ溢れる人材が育つのではないのでしょうか。そういった期待も込めて支援させていただきました。ほかに、市民向けの公開講座の開催など、大学と地域につながる学びの場の創出にも活用いただけると嬉しいです。



創業は昭和14年。「私が3歳か4歳の頃、本館町(現在の龍町)から川口町に移ってきました。龍町の龍踊の衣装を縫ったことが父の自慢でした」と笹本さん。

株式会社ささや
長崎市川口町6-29
TEL.095-844-6161

大学への支援はこちらから

卒業生イマナニシテル!?

卒業生の思い出や現在の様子を知ることができる「卒業生イマナニシテル!？」が「Web Choho」限定で公開されています。皆さまのお知り合いが登場するかもしれません。また、記事投稿も随時募集しております。ぜひご覧ください。



<https://choho.nagasaki-u.ac.jp/tag/alumni/>

西遊基金



「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、さまざまな問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援と、教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。TEL:095-819-2155

私たちの
思い出の場所

中華軽食 三八ラーメン 住吉店

みやぐちあきのり
常務取締役 宮口哲典 さん

いつの時代も変わらない思い出に残る豚骨ラーメン



買い物の途中に気軽に立ち寄れる店構え。

昭和38年10月、祖父にあたる創業者が“長崎独自のラーメンを作りたい”という想いを持って、本店を長崎市銅座町に開店しました。その後浜町店、銅座店に続いて、昭和54年5月に住吉店を開店。当初は平屋の

建物から始まったと聞いています。

店がある住吉商店街は、私が生まれ育った町でもあります。子どもの頃はたくさんの買い物客が訪れる、毎日がお祭りのような賑やかな場所でした。当店も周辺の店から出前の注文が多く、深夜0時まで営業していました。また、毎年3月8日は「三八の日」と題して、1杯100円(大盛り200円)でラーメンを提供。猫の手も借りたいほど大忙しでした。長崎大学の学生さんも、食べに来てくださっていたと思います。「三八の日」が終了して随分経った今でも、問い合わせくださる方や来店される方がいらっしやるんですよ。



通年メニューのおでんは、人気のため夏場も提供。
写真は住吉店副店長の里博之さん。

現在は、長崎大学工学部の学生さんがアルバイトを頑張ってくれています。1年生の頃から働き始めてはや3年。責任感のある仕事ぶりで気配りもでき、とて



“変わらない長崎の味”をモットーに麺と一体化するよう考えられたスープは、豚骨ベースの少クセのある味わいが特徴。2種類の味付けをした三枚肉とメンマ、ネギ、ゴマがトッピングされています。

も頼りになる存在です。

創業62年。住吉店は47年になります。時代が大きく変化する中で、現代にも通用するラーメンを作ってくれた祖父に感謝しながら、これからも三八の味を守っていきたいと思っています

ます。卒業生の皆さんにも、ぜひ食べに来ていただきたいです。“長崎にこういうラーメンがあったな、懐かしいな”と学生時代を思い出していただけるように、私たちが切磋琢磨します。皆さんのご来店をお待ちしています。

アンケートのご協力をお願い

以下を明記の上、広報紙Chohoへのご意見・ご感想をお寄せください。

- ①面白かった記事
- ②本紙に対するご意見・ご感想
- ③今後取り扱ってほしい内容
- ④長崎大学からの情報発信全般についてのご意見・ご感想
- ⑤本学との関係
- ⑥年齢
- ⑦氏名(ふりがな)
- ⑧郵便番号
- ⑨住所
- ⑩電話番号



◎はがき：〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学広報戦略本部 宛て

◎FAX：095-819-2156 ◎メール：kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp

◎募集期間：2026年10月末まで

読者プレゼント

アンケートにご協力いただいた皆さまの中から、抽選で10名様に、長崎大学オリジナルQUOカード(500円分)をプレゼントします。賞品の発送は2026年11月を予定しています。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



長崎大学SNSサイト



X



Facebook



Instagram



YouTube

Choho

定期送付サービス
受付中!



広報紙Chohoはその多くを、各学部同窓会様の会報誌送付の際に、直近の号のみ同封してお送りしています。そのため、読者の皆さまには必ずしも毎号お届けできないケースがあり、「定期送付をしてほしい」とのお声をいただいております。定期送付を希望される場合は、上記サイトへアクセスしていただき、ご登録をお願いいたします。皆さまのご利用をお待ちしております。

送付先変更のご連絡はこちらまで



編集後記

かつて鎖国の時代、日本で西欧との交流が続けられていた長崎。出島を通じて多様な文化が行き交った長崎は、古くから独自の歴史と風土を育んできました。そうした環境の中で育まれた長崎の方言は、人々の暮らしに寄り添いながら受け継がれてきた言葉です。例えば、秋の長崎を彩る「長崎くんち」の掛け声に混じる長崎弁の響きは、祭りの熱気とともに、先人たちが紡いできた暮らしの記憶を今に伝えています。

今回の取材を通して、方言とは単なる言葉ではなく、人々の営みや歴史そのものを映し出す「生きた文化」であることを改めて実感しました。そして、普段私たちが何気なく使っている言葉の中には、県外の方には通じない言葉があると知り、驚くと同時に、言葉の違いが生む面白さを感じる機会にもなりました。

その方言が今、静かに姿を消しつつあります。消えゆく方言を記録し、研究し、未来へ残そうとする取り組みは、まさに文化の継承そのものです。だからこそ私たちがまた、方言を日常の中で使い続けていくことが文化を守り伝えることにつながるのだと感じました。

本号が、長崎の方言とともに長崎の文化の魅力を知り、その奥深さに触れていただくきっかけとなれば幸いです。

(広報戦略本部 前田美咲)

